

シンポジウム  
文学館の魅力を求めて

中村稔

詩人・弁護士  
日本近代文学館理事 専務理事

篠弘

歌人・  
日本現代詩歌文学館館長

加藤幸子

作家

今橋映子

東京大学助教授

中村 井上さんと瀬戸内さんのお話が終わったら、半分ほどの方がお帰りになってしまわないかと心配しておりました。ほとんどの方々がお残りいただいて大変うれしく思っております。私は日本近代文学館の理事長としておりますが、日本近代文学館というのとはもともと、散逸して、放っておいたらなくなってしまう、二度と手に入らないというような雑誌、単行本、あるいは肉筆の原稿などを収集し保存し、それを研究者のために閲覧に供するということを目的として設立されたものです。四十三年前に財団として発足し、館が建設され開館したのは三十八年前になります。そういう歴史を持つておりますので、わが国・日本の文学館運動は、われわれの館から出発したというふうに自負しているわけです。

そういうことで、そういう資料を研究者にお目にかける、あるいは愛好者にお目にかけるのが本来の使命なのですけれども、われわれが収集している貴重な資料は百数十万点に達しています。それらはちよつと数え上げたら切りがないくらいにあつて、例えば夏目漱石の「明暗」の原稿であるとか、「道草」の原稿であるとか、一葉の「たけくらべ」の原稿であるとかそういう古いところから始まりまして、

新しいところだとここにいらつしやる加藤幸子さんの叔父さんに当たる、劇作家の加藤道夫さんの遺品、遺稿一切とかもあります。

非常に貴重なものがたくさんあるのですけれども、そういうものがただ研究者のためにだけあるのでは、やはりもつたない。ぜひ、もつと広く見ていただきたい。そしてそういうものを一般の文学愛好者の方々に見ていただき、またそういうことを通じて文学に対する関心をより深めていただきたい。そういう気持ちで文学展というものを四十年間の間に数多くやってきたわけです。その間に、さつきも申し上げましたけれども、文学館というものが全国にたくさんできまして、主なものだけで七十。公民館の一室にあるというような記念室のようなものまで数えまして五五〇余というような状態です。

私どももそういう趣旨でこれまで数多くの文学展を催しております。文学展を大きな費用と労力を掛けて開く以上は、なるべく多くの方に見ていただきたいと念願しています。しかし、文学展というのは正直申し上げて、多くの場合につまらないものなのです。文学というのは読むものであつて、見るものではないですから。絵でしたらその絵を

見ればそれが好きか嫌いかわかりませんが、文学者の原稿を見たからといって面白いものではないと言ったら語弊がありますが、特殊な人でなければ面白くない。例えば漱石の原稿ですと、「吾輩は猫である」の原稿であればほとんど推敲の跡がない。ところが「明暗」の原稿になったら推敲の跡がすごいもので、それだけ「吾輩は猫である」は漱石が割と気軽に書き飛ばしていた。それに対して「明暗」の時期になると漱石が一言一句いかに苦労しながら書いていたかということも分かりますし、その間の筆跡の違いも分かれれば、また後年漱石が使っていた「漱石山房」というような名前の入った特注の原稿用紙を使っているというように、いろいろなことも分かる。肉筆の原稿や書簡から私たちはじつにいろいろなことを教えられます。

例えば、武者小路実篤記念館へ行きますと、武者小路さんの使った硯があります。その硯に穴が開いている。なぜ穴が開いているかという、武者小路さんという人は、毎日毎日熱心に墨をおすりになる。われわれだと硯に穴が開くなんてことは信じがたいのですけれども、武者小路さんは毎日毎日真心込めて熱心に硯に墨をおすりになっている。そうすると硯に穴が開くまでお使いになる。そうする

となるほど武者小路実篤というのはこういう人だったのか。そういう感銘を受けるわけです。ただ、一般的に言って特定の文学者で、非常に多くの方が関心を持つ。あるいは多くの方が既に作品を読んでいて、その作品を読んでいく興味から文学展を見たいという作家は、漱石をはじめとして十人いないのではないかというのが実状なのです。

私はこの数年ずっと考えておりますことは、文学者を切り口とするのではなくて、別の切り口で文学に関心を持っていたら、そういうような展覧会ができないかということとを考えてきました。それはどうということかと、その場に初めて来て見ても分かる、そういうものをお目にかかることによって、文学というのは面白いものだなということが分かるような、そういう展覧会というのはあり得ないかということなのです。

そういう企画で最初にやりましたのが「愛の手紙」展です。文学者がその恋人に宛て、あるいは妻に宛て、あるいは夫に宛て、あるいは子供に宛て、そういうような手紙というものは予備知識なしにも分かりますので、そういうような展覧会を開催して、これは割と多くの方に見ていただいていた喜んでいただきました。やはり手紙というものは、作品

と違ってプライベートなもので、もともと公表を目的にしないで書いているものですから、プライベートがかなりあからさまに出ているものもあれば、例えば夫から妻へ宛てた手紙に、芥川龍之介の場合だと「文子様」と書いてある。あるいは「文子へ」と書いてあるものもある。「文子」というのがある。そういう宛名書き一つをとっても文学者によってどういふふうに宛名を書くのか。それがまた夫婦関係の親密さの反映でもあるというようなこともあるわけです。

最近、六月に私どもの文学館で開催致しましたのは「花々の詩歌」展と言うのです。これは花を題材にした歌とか俳句とか詩とかそういうものだけを集めて、それで春、夏、秋、冬に分けて展示したもので、先程、加藤さんから大変おほめいただいたのですけれども、実は二五〇点ぐらいの資料を展示したのです。例を若干申し上げますと、例えば春の歌で与謝野晶子に「白鳥が生みたる花のこゝちして朝夕めづる水仙の花」という歌軸がある。水仙の花を見ながら、これは白鳥が産んだのではないかと思うような気持ちにして、朝夕愛しているという、そういういかにも晶子らしい歌で、篠さんなんかがお作りになっている現代短歌とは全然違いますけれども、やはりこういうのが作者の個性

なのだなというところがございます。

それから、例えば芥川龍之介のこれは扁額になっているのですけれども「またたちかへる水無月の嘆きを誰にかたべき。沙羅のみづ枝に花さけばかなしき人の目ぞ見ゆる」という詩がございまして、これは片山広子と言うペンネームで知られる松村みね子さんと言う方に対する恋心を歌った芥川の詩で、これが自筆で出ているわけです。

それから例えば有島武郎の短冊が残っております、「明日知らぬ命の際に思ふこと色に出つらむあしさぬの花」。ご承知の通り、有島武郎と言う方は心中なされた。これはその前の晩の辞世の歌なのです。こういうのはやはりそう思うって読むと、どういう心境でこういう短冊を残したなということを思いやると、ちょっと涙ぐましい感動があるわけです。

また、佐藤春夫の軸に「さまよひ来れば秋くさののこりて咲きにけり おもかげ見えてなつかしく 手折ればくるし花ちりぬ」というような、これは佐藤春夫のごく若い時の『殉情詩集』という、思春期の少年の花に託した恋人に対する思いをうたった、私などは少年時代に非常に愛唱した詩なのです。葛西善蔵に「秋ぐみの紅きをかめば酸

くしぶくタネあるもかなしおせいもかなし」というようなのがあります。葛西善蔵というのは私小説の作家として有名で、「おせい」というのは善蔵が同棲していた女性ですけれども、その小説の中に出てくる歌です。「秋ぐみの紅きをかめば酸くしぶく」、韻を踏んでいるのです。「タネあるもかなしおせいもかなし」。

そういうのがたくさんあって、例えば高村光太郎には「リングゴばたけに雨降りて／銀のみどりのけむるとき／りんごたわゝに枝おもく／沈々としてあかきかな」という四行詩。これに高村自身の絵が付いている。そういうものが出てくる。リング焔に雨が降って、銀の緑に煙る、リング焔の雨が降って緑がかった銀色に大気が煙っている、リング焔はたわわに枝に実って、それで「沈々としてあかきかな」。沈むという字を重ねているのですけれども、静かに暗く重くたわわにリング焔が実っている。そういう情景でいながら、しっとりした叙情に富んだ歌だと思ふのです。

もっと若い人のもありますけれども、展覧会としては、有名な林芙美子さんの「花のいのちはみじかくて苦しきことのみ多かりき」というような色紙もあり、そういうものが二五〇点ぐらい並んでいる。

これは実に面白いものなのです。反省致しますと、こういうのを一首ずつ、今みたいに私が解説しながら読んでくと面白いのですけれども、一首ずつ鑑賞していくのに五分ぐらいずつかかるのではないか。そうすると二五〇点もありますと、とてもくたびれて見られるものではない。それから、どうもいったいどういふところが面白いのかというところも、歌を詠み習いし、俳句を詠み慣れている方だとすらすらと分かるかもしれませんけれども、必ずしもそうでもないかもしれない。

だから文学展というものを、来館者に文学に関心を持っていたらどうということに苦勞しているわけですけれども、来館者に享受していただくのは本当の話難しいものだなというのを私はつくづくと感じています。例えばこの「花々の詩歌」展でも、どこか地方の文学館でまたやっていたらどうと思つていられるのですけれども、そういうときにはもっと工夫して、もっと近付きやすい、興味を持っていたらだきやすいものにしたたいと考えております。

差し当たつて最初の話は十分ぐらいずつ四人が話しする予定ですから、私もだいたい超過致しましたが、そのあとで四人でそれぞれの方の話から受けた印象等を雑談的にお

話しし合おうという計画でございます。私が独断と偏見で勝手に決めた順序に従いまして、この次に篠さんにお話しただくという事に致します。これはたまたま年代順ということになります。(笑い)では篠さん、お願いします。

篠 日本現代詩歌文学館の篠弘です。よろしくお願ひ致します。中村さんが館長、理事長をしていらつしやる日本近代文学館。これはもう皆さん熟知していらつしやるわけですが、詩歌文学館のほうはいくぶん説明をしませんと、どこにあるのかご存じの方も少ないかと思しますので、先に紹介をさせていただきます。

岩手県のちようど真ん中ぐらいでしょうか、中尊寺よりは北、啄木の渋民村よりは南という所です。例の啄木の「やはらかに柳あをめる北上の岸辺目に見ゆ泣けとごとくに」という、「やはらかに柳あをめる」という風土は啄木と同じです。ただ、啄木の北上川のほうが上流で、詩歌文学館のあります北上市はちようど中流でしょうか。でも兩岸、柳が自然堤防になっているまだ古い日本の自然が生きている所です。

私は館長を仰せ付かってから四年ぐらいですが、二十年ほど前に計画ができて、そして発足する段階から北上とい

う町に向いて事情を心得ております。当時は人口が三万から四万の町であったのですが、現在は十万近い町になっています。これはちよつと意外に思われるかもしれませんが、北上市、昔は黒沢尻と言った所なのです。黒沢尻周辺に工業団地ができて、これがだいぶ成功しまして、今や煙突のない工場がたくさんできていて、そしてそこに若者が集まってくるという田園都市になりました。

近くには今申し上げた石川啄木記念館、宮沢賢治の記念館、それから高村光太郎の戦後過ごされた山荘等々、詩歌に関係するゆかりの土地なのですが、北上には何もありません。昔の牛を売り買いたした市場の跡で、今は何もないのですが、かえってそういう何もなかった所に文学館ができるということになりました。現在百万点近い短歌、俳句、詩、川柳等の資料が集まっておりますが、三年ほど前に増築しまして、合わせて五千平米ぐらいの床面積を持ち、恐らく二百万冊は収容できるのではないかといい規模になりましたが、質的にはまだ日本近代文学館に及びもつかない現状でございます。

ただご存じのように、日本近代文学館は小説・評論にウエートが掛かかっていて詩歌のほうはだいぶ軽視されがちで

した。結果的にそうなっているところを、北上は詩歌の有名無名を問わず作品を集めるという、視点を明確にして今日に至っております。開設してから十三、四年ですからまだ発展途上かもしれません。申し上げたいことはたくさんございますけれども、今中村さんが行事、イベント、展示のことをおっしゃいましたので、それに乗っていくつか申し上げたいと思います。

今、花の話が出ましたけれども、実は詩歌文学館も水とか、風とか、火とか、あるいは命、スポーツ、ふるさと、こういうテーマで毎年展示会をやっています。これは、歌人、俳人、詩人、柳人に、比較的近年の作品を色紙ならびに生原稿でもよしということ、むしろ新たな作品を数十人の方に出していただいて、それを大きな展示室に飾り付けます。同時にその空間は、訪れた人たちの詩心を誘うようなそういう場所を提供し、詩歌に親しんでもらう工夫を凝らしたりしているのが現状でございます。

弘前に続いて北上もなかなかの桜の名所でありまして、先年桜を企画してやはり展覧会を致しましたが、実に多くの方たちが訪れていたことを思い起こします。一方、昨日俳句の講座のための祝辞をフアクスで送ったのですが、例

えば教師の人たちに俳句を生徒に教えるための講座を開いています。ところがこれは去年は全滅でして、先生が集まらないので苦労したのですが、今年ほうまくいきまして、県内の国語の先生たちが、俳句をいかに子供たちに教えるかという講座が盛況に始まりそうです。

特に伝統詩としての短歌、俳句、川柳は、放っておいては教師の人たちもつい教科書に載っていてもパスしてしまいがちです。しかししかるべきアドバイスをしながら、やはり定型詩としての短歌、現代詩はもとよりですけれども、次の世代に普及していくための運動をしようではないかという事なども手掛けている次第です。

そうした講座を開いておりますが、私も実は歌人として北上に、秋は六回赴きまして実作講座をすることにしていきます。たくさんの愛好者がいるにもかかわらずこれまでそうした場がなかった人達に、より良きアドバイスを、教えられる場を何としても持ちたいということでこの数年連続けておりますが、やはりそういう地域の詩歌人に愛される場をつくる、そういうふうなことを文学館の運動の一環として心掛けております。

その規模は三十人単位で二クラス作ることに、年ご

とに活況を呈しています。先着順の方々を集めてやっています。研究者を第一義に対象とした対策も欠かせませんが、やはり地元の人たちをどう文学館に来ていただくか、そして詩心を誘発していただけるか。そのための努力をやはり図書館とは違って、詩歌文学館はすべきではないかということを感じています。

実は文学館のあります場所は、黒沢尻工業高校と言ってかつてラグビーでだいぶ名をはせた工業高校がありました。その校舎、グラウンドの跡地を利用してあるわけです。ですから今、「詩歌の森公園」と言う三万平方メートルからの庭ができておりますが、そこが大変町の中でもいい広場になりました、真ん中が芝生ですけれども造園も見事でありまして、ブナの木に囲まれて東北の地にしては実に緑豊かな空間ができました。そこに子供たちがおぼあちゃん、おじいちゃん、あるいはお母さんたちとたくさん晴れた日は集まるのです。これは世田谷文学館のヒントをいただきまして、一階フロアの所は子供たちが遊べる、そしてまた子供たちの短歌、俳句、詩の入門書なども、絵本のようなものも置いて、公園で遊び疲れた子供たちもふっと入れるようなそんなような仕掛けをして、とにかく地元と

まずは一体になれるシステムを手掛けています。それをまずご紹介して、あとでまた少ししめな話を申し上げます。

**中村** 次に加藤さんをお願いしたいと存じます。加藤さんはわれわれ日本近代文学館のいわば仲間の一人で、それに加えて昨年「アイヌ神謡集」と言うのを残して若くして亡くなった知里幸恵さんの展覧会を北海道から始まって巡回したんですけれども、その展覧会をもつぱら組織しPRし大いにおやりになった。われわれのこともよくご存じなら、そういう展覧会のこともご存じなので、その辺のところを手掛かりにして、加藤さんから少しお話しただけらと思えます。

**加藤** 知里幸恵さんは「アイヌ神謡集」という、アイヌのユカル（ユーカラ）、アイヌ文学の翻訳者です。アイヌの人たちは字を持たないので口承で伝わってきたわけなのですけれども、そのユカルの中から選んで非常に美しい日本語に翻訳しました。そのきっかけというのは、金田一京助博士が北海道で、言葉の収集の旅の途中で彼女に偶然に出会ったのです。それがきっかけで彼女の才能を見抜きまして、それからいろいろ手紙が往復しまして、それで最終的

には東京の金田一博士の家で執筆するわけです。もともとアイヌの言葉をローマ字で書いて、それからその横に日本語を付けるという極めて異色の翻訳なわけですけれども、私は学生時代ぐらいから知っています、大変気に入って、ずっと好きだったんです。

好きだったのですけれど、あまり一般の方には知られてなかったと思うのです。たまたま私は北海道出身なので、時々北海道へ行きましていろいろな方とお会いするのですけれども、二〇〇二年だったと思いますが、札幌に行きました時に、知里幸恵さんの「アイヌ神謡集」を広めたいという趣旨で非常に熱心な人たちが集まって、そしてその方たちがちょうど二〇〇三年が知里幸恵生誕百年になるので記念行事をしたいということだったので。私が昔から「アイヌ神謡集」を愛読していたことをご存じだったものから、半ば私の意思ではなくて、その方々の非常に熱い気持ちに拉致されるようなたちで、知里幸恵生誕百年の記念行事実行委員会の一人にされてしまいました。

この会は非常に小さなグループで、池澤夏樹さんも上のほうのグループの会長か何かしていらっしやいました。一度もお会いしていないのですけれども、たまたま札幌にい

た時に私が行ったので、みんなが集まっているいろいろ相談しようということになったらしくて、実行委員の人たちの集まりがあったのです。その時には、とにかく北海道ではちやんと大きなものをやる。いろいろなイベントをあちこちでやる、たとえば、北海道文学館で夏に、長い期間「知里幸恵展」を開く、という話でした。それからあと内地、内地というのは北海道の人が言う言葉ですが、つまり本州では金沢と徳島で、さつき瀬戸内さんに聞きそびれてしまったのですけれど、数日間展示とイベントをすることだけ決まっていたのです。

私がつい言わなくてもいいのに、「もちろん金沢、徳島でやることは大賛成ですが、やはり大勢の人にこの素晴らしき詩集を知ってもらうためには、東京ぐらいの大都市で開いたほうがいいのじゃないですか」なんて口を滑らしてしまったので、たちまちその場で交渉人に指定されてしまったのです。東京での何か会を考慮してくださいと言われまして、私はそんなつもりで言ったのではないのですが、責任上、東京に戻りましてから困り果てまして、日本近代文学館の副理事長の黒井千次さんにお電話しました。

駄目だろうかと半ば以上は思いながらご連絡しまして、

こういうことでできれば東京で「知里幸恵展」をしたいのですが、とお話しして、それについては日本近代文学館の行事の一つに加えてもらえないでしょうかと恐る恐る申し出たのですが、ちょうどタイミング良く、次の年のプログラムを決める時期だったらしいのです。

それで早速、黒井さんが、「次期の理事会に掛けてあげましょう」とおっしゃってくださったものですから、「ではお願いします」ということになりました、その理事会の席でどういような議論がされたかはよく分かりませんが、もとにかくすぐに承知していただきまして、来年の九月から十月の一月間ぐらいを「知里幸恵展」に充てるということに決まって、公表になってしまったのです。なってしまうなんて変ですけれども、私はただ北海道の熱意ある人たちの活動を助けようと思ってお話ししたので、その時私はこれで自分の責任は果たしたかなと思いました。

ところが、この中に北海道の方がいらっしゃるかどうかわかりませんが、北海道の方は本当に大陸的のんびりしているのです。ほかのことでも本当にそういうことがよくあって、私はいつもどきどきしているのです。私も札幌生まれですが、東京生活が長くなりましたので、もと

もとは大陸的性格ですけれども、多少は抜けてきました。その北海道のグループがなかなか細かいことを決めてくれない。

だんだん心配になってきまして、文学館の方も多分同様だったと思うのですけれども、私の所に何回か連絡がありました。今どうなっていますかとか、やはりこういうのは宣伝をしないと来ていただけないのではないのでしょうかとかいろいろおっしゃってくださって、それでどうとう私しかする人がいないのではないかというふうに追い詰められました。それならばせつかくいい場所で「知里幸恵展」をすることになったんだから、やはり質の高い展覧会にして、そしてたくさんの人に来てもらって「アイヌ神謡集」なり、彼女の生き方、人生も知ってもらいたい。アイヌ文化についても広く知ってもらいたいと思いましたが、それからかなり頑張りましていろいろ計画しました。

というのはいろいろな所に、まず新聞とか雑誌に知里幸恵さんのことを紹介する記事を書いてもらうということですが。それから、たまたま登別で、登別というのは幸恵さんの故郷ですけれども、そこでシンポジウムをやった時に津島佑子さんが講師として来てくださったものから、津

島さんと相談しまして、それぞれ分担して読売と朝日に展覧会の直前ぐらいにエッセイを書きました。そのほか私も必死に追い詰められた気持ちになりました。毎日とか東京新聞とかにも頼み込んで記事を出してもらったりしました。展示物に関しては北海道文学館にお願いしました。

でもそのおかげでいぶ不特定の方々に来ていただいたのではないかと思います。週末には必ずいろいろなお話、講演会とかトークとかイベントをしましたが、随分多くの方が来てくださったと思います。それから個人的な友人・知人にはみんな一筆書いて、チラシを郵送したりすることもしました。そのおかげか割合に好評で、結果的には大勢の方が「アイヌ神謡集」のことをよく知って、反響も、いろいろな方からとても良かったというお話を聞きました。前から知里幸恵さんのことを知っている方はもちろんですが、知らない方も非常に刺激を受けて、これからもっとその本を読んだり、もっとアイヌ文学のことをいろいろ知りたいというような感想をたくさんいただきました。

経緯を今お話しただけなので、そこから何を私が得たかについては、ではまたあとでします。

中村 今度は今橋さんをお願いします。今橋さんは、東

大で比較文学を教えていらつしやいまして、『異都憧憬 日本人のパリ』と言う著書で一躍学問的にも文壇的にも名を知られるようになった。これは金子光晴を含め、文学者を中心にしたパリを舞台にした比較文学的研究の書なので。

それに刺激されて私どもも考えて、今橋さんに「パリ憧憬」という、パリを日本文学者がどういうふうに見てきたかということテーマにした展覧会を、今橋さんの見方で勝手に作ってみていただけませんかということをお願いして、そういう展覧会を企画致しまして、東京は駒場でやり、高知でやりということをお願いしたことがございます。それからもちろん留学経験がおりになって、殊にフランスについてはお詳しいので、その辺のところもその事情も踏まえて短く、手短にお話しただけならと思います。

今橋 ありがとうございます。こんにちは、今橋でございます。十分間でそれだけのことをお話しするというのはどうしようという感じです。ですから展覧会のこととはあとの時間に回させていただきます、パリにおいての文学館のお話を最初にちよつとすることで、日本の文学館との違いとか、同じ点とかをまず考えてみたいと思います。そして数年前

らやましい——どこかの政府はこういう文化とか、特に文学なんかにはほとんどお金をかける気はないらしい、ということをよく私たちは感じます。そしてフランスはすごいと言うわけです。フランスは確かにすごいのですが、非常に厳密に言いますと、フランスはそれらの文化遺産をいかにして商売にするかと考えている国です。もともとこれらの時代はこれでいいのではないかという気がしませんか。つまり、文学館というのもそういう意味で、例えば郷土のそれぞれの土地のとても大切な作家を縁として、多くの人を呼び、そしてそこにお金を落としていただくというので構わないのではないかなと私などは感じるのですが：あとの三十分でお叱りを受けるかもしれません。

実はパリではそういう戦略を立てて、十五の美術館の中に文学館も三つ含めて活動しているわけです。つまりそこでは美術館と文学館に経営や運営上の差異はない、という考え方なのです。

ところで今、日本の多くの美術館が非常に苦しんでいます。その第一は企画展のあり方。展覧会にとっても行き詰まりを感じているのです。非常にお金がかかるのに、来ていただく方からの入場料とでは釣り合わないこと。それから

企画自体を立てるのが大変なこと。輸送費や保険料にお金がかかること。さまざまな大変さを抱えたうえに、結局自分たちは「見せる」ということだけに汲々としていて良いのかということに、美術館は悩んでいます。

そこでこのところ、美術館の方たちがいくつか打ち上げている花火みたいな言葉があります。その一つは、「フォーラムとしての美術館」。「フォーラム」というのはお祭り広場と考えればいいのではないかと思います。つまり日常的に美術館に人が集まって、そこで何をするわけでもない、お祭りをしていてもいいし、しゃべっていてもいいし、ご飯を食べていてもいい。普段みんなが集まれるような場所としての美術館、こういうことが考えられないかということとを言っているわけです。

先程、篠さんが子供が遊べる場所としての詩歌文学館ということをおっしゃっていたのはまさにこれで、美術館もそういう場所を今作り出そうと一所懸命になっているということだと思います。あともう一つ私が考えるのは、文学館と美術館というのはもつと横に連携してもいいだろうなということ。例えば今年フランスでは「ブラジル年」だそうなんです。日本は「ドイツ年」だそうですが、フランス

は今年「ブラジル年」にちなみ、この十五の美術館や文学館がお互いに共同して、ブラジルに関する展覧会を三つ、四つ横に並行して今やっているようです。

だから、例えば今年日本はドイツ年ですから、ドイツに行った作家、当然のことながら森鷗外が浮かぶわけですが、森鷗外展を文学館でやって、それでドイツの画家の展覧会を美術館でやってもらったというふうには、横で連携していけばとてもいいのではないかなと私は思うのです。こういうのは、現場にいない者が勝手に言うことなので非常に無責任ですが、ただフランスのような事例を見てみると、そういう展開の仕方をこれからしていてもいいのかなという感じはします。

私も含めてこの会場におられる方は、美術館を動かしている側ではなくて、美術館や文学館を楽しんでいる側です。楽しんでる側からするとどういうふうに考えればいいのか。利用者として私は文学館の多くの所にいつもお願いしたいと思っているのは、くつろげる場所としての文学館と言ったらいのでしょうか。つまりフォーラムとして、お祭り広場であるというのもすごく面白いのですけれど、同時にアジール―アジールというのは「隠れ場」と言った

らいいのでしょうか、フォーラムではなくてアジールとしての場所であってほしいということですか。

本一冊持っていて、そこで二時間静かに読めるようなそういう場所。そこで例えば展覧会をやっている。今日は知里幸恵さんの展覧会をやっている。知里幸恵つてだれだろうと思つて入つてみる。アイヌのことを日本語にしたこんなすごい人がいるのを知つて、知里さんの詩集を買おうと思う。自分が今日読んでいるのは森鷗外だけれども、知里幸恵という人も今日知ることができてすごく良かったというふうな、そういう場所。その三時間は家のことも職場のことも忘れていられるというふうな、そんな場所があったらすてきなと私は常日頃、とても思つております。

ここで恥ずかししながら、私自身の最初の文学館体験というのをお話ししましょう。八つか九つのことですが、東京の青梅にあります吉川英治記念館に連れて行かれました。梅の時期に行つたので、すごく混んでいて車で酔いそうになつて着いて、もうへとへとだと思つていたらその梅の花がきれいで、すごく良かったのです。それでとてもご機嫌で、子供なのに塩羊羹を気に入つてしまい、(笑い)そこで飲んだお抹茶も良かった。そのあと吉川英治記念館に入

ったのです。吉川英治というのは誰かも知らないし、宮本武蔵なんて誰？ という世界だし、結局その中で見たものは何一つ覚えていないのです。ただ、今大人になった言葉で言うと、吉川英治という人にささげている館全体に漂っている敬意みたいなもの、これが何か子供としてもとてもいい感じでした。吉川英治という人はよく分からないけれども、でも私はこの梅林があるここは好きと思っただけです。そんなことから実は文学館体験は始まるのではないかなという気がしています。

それでは最後に美術館と文学館が一番違うところは何か。同じだと思いと、私はずっと言ってきたのですが、一番違うことは何かというと、実は文学館では本物を持ち帰ることができるということだと思います。美術館は、例えばゴッホの展覧会に行っても、絶対にゴッホの本物は手に入れて帰ってこられません。絵はがきかカタログぐらいです。

けれども知里幸恵さんの展覧会に行けば、そこに詩集さえ売ってれば、あるいは外の書店でも、知里さんの仕事はそのまま本物が私たちの手に入るわけです。そういう意味では、言葉というすぐ近しいすぐ手のひらに入れるこ

とができる情報を、文学館を通じて得ることができるという意味では、実は私たちは美術館よりも豊かな体験をずっと継続してできるはずなのだという気がするのです、私は文学館には死はない、未来は続いていくというふうに思っています。ではこのぐらいで。(拍手)

**中村** どうもありがとうございます。一通り終わったところで、先程の知里幸恵さんの話でもうちよつとお聞きしたいところがございます。その前に私から申し上げると、知里真志保さんと言う方がおいでになって、そのお姉さんが知里幸恵さんで、この姉弟は二人とも天才と言っている人だと思いのすけれども、「アイヌ神謡集」というのを読むといかにわれわれがアイヌを知らないか、かつアイヌとというのがいかに独自で高度な文化を持った人たちであったかということが非常によく分かる。そういう意味で僕は知里幸恵さんの作品に非常に教えられたのですけれども、その辺のところできつきおっしゃり足りなかったところをちよつと補足していただきますようか。

**加藤** 「知里幸恵展」を実際に行う、実行する側になつてしまったということで、大変な時間と労力を私はささげたわけですが、でも結果的にはやはり私の大好きな

知里幸恵さんの世界が大勢の方に広がったということでも満足しました。それは率直な感想ですけれども、同時に、やはり知里幸恵はもう今から百年以上前の人ですが、実は彼女の作品、つまりアイヌの人たちのものの考え方や文学が、ちょうど今の時代に合っていたのではないかとあとになってから考えたのです。それは、やはり自然との共生と申しますか、野生動物が滅亡している今、いろいろな人がもう一度そういうものを身近に取り返したいと思っている気持ちとびつたりした内容の文学であったということであって、古い文学というよりは、これからみんなが立ち向かっていかなければならない一つの文学の分野ではなかったか。それにすぐく敏感に大勢の方が反応してくださったのではないかなと思っています。

時代に合ったテーマというの、やはりとても大事なことかなという気がしました。私の感想はそれぐらいなのですが、私自身実は今まで文学館はあまり行きませんでした。美術館とか博物館は大好きで、旅に行くたびに必ずと言っていいくらい行ったり、東京にいても大好きな美術館があつてよく行くのですけれども、文学館というのはあまり行かなかつたのです。どうしてかなと考えてみたら、やはり

疲れるのです。

美術館とか博物館は何も心の用意をしなくても、その場で感覚的にすぐいろいろな感動を与えてくれて、そしてそれが刺激となつてまた自分自身が活性化してくるといふか、元氣になつて、私の場合でしたら創作の源になるとかそういうことがあります。一般的な意味での文学展というのはやはり本を読むのと同じでなかなか難しい、頭がすっきりしていかないと行く気がしない。ですから、私の場合は仕事の関係で行くことが多い、あとは特別に興味のある作家の文学館には行きますけれども、それ以外はあまり行っていないなかつたのです。さきほど中村先生のほうからお話があつた、「花々の詩歌」展はとても私には良かったです。それはやはり、考えてみたら展示物が直筆だつたからです。歌とか詩とか俳句とかに、その人の字が書いてある。その字がその人自身をまた表している。それが非常に直接的に私に入ってきた。花の絵もちろんとくさんあり、作家とか、詩人とか、歌人の方が描き残されているということも初めて知つて、これは字とか絵とか、それから書、字体のほうのことですけれども、そういうものと一体になつて私の中に入ってきたからとても面白かつたのかな、という気

がしました。

中村 全国文学館協議会としては、相互に文学館が協力しようというような基本的な姿勢がございまして、例えばこのあいだまで鎌倉でやっておりました「漱石山房の日々」展というのは、神奈川近代文学館とわれわれ日本近代文学館の共同で、両方が資料を出し合って作ったものなのです。そうするとやはりより充実したものができる。いろいろなかたちで、文学館同士の協力関係を作っていく、また、それを巡回していくというようなことを一つには考えているわけですけども、今、今橋さんのお話を伺うと、文学館と美術館との協力関係というのは検討してみるべき問題なのではないでしょうか。

例えば、ボードレールの時代だと、彼自身が美術評論をたくさん書いていて、美術に非常に詳しい方だったわけですけども、今の日本の文学者だと、ボードレールがいけないのは当たり前だけれども、例えば「明星」の時代でも文学と美術の間でいろいろな関係はあることはあるわけです。そういう方向というものも一つ考えられるのかなということ、私今感じました。

あともう一つは、加藤さんのお話のように「知里幸恵展」

があれだけ評判が良かったのは、本当の話、これは加藤さんを筆頭によく新聞等が書いてくださったせいもあるのですけれども、やはり「アイヌ神謡集」です。駒場でやっておりました展覧会の中でも来館者が多かったものの一つでした。それをやるまで知里幸恵の名前を知っている人は、恐らく世の中に百人に一人もいなかっただろうと思うのです。ところがやってみると、これは非常にいいものだと思います。口伝えにだんだん分かってくる。また新聞等を通じて分かってくる。やはりわれわれ文学館の使命というのは、一つには加藤さんがおっしゃったように時代が要求しているものを「知里幸恵展」は提供したのだという面があると同時に、まさにいつまでたっても太宰治、夏目漱石、中原中也に宮沢賢治、そういうのではなくて、やはりその時代に合った人あるいはテーマを探して構成していくことが必要だと思いました。

篠さん、その辺のところはいかがですか。

篠 今日には瀬戸内さんのお話があって徳島のことを改めて認識したのですが、この秋、徳島の美術館で所蔵品の作品を現代歌人に短歌に詠んでもらって、その作品、彫刻であればその彫刻のサイドに、短歌を飾って併せて鑑賞して

もらおうという企画が持ち上がっています。既にこれは上野の西洋美術館、去年は茨城の近代美術館でも行ったのですが、そういうコラボレーションが美術品と短歌はできるのです。

ところがこれが俳句になりますと、このあいだも俳人と話したのですが、俳句は短すぎて美術品をこなせないと言うのです。詩はこなせると思うのですが、今度は長すぎて展示が大変になります。短歌はちょうど三十一音の一行詩ですから、横に添えるには格好の定型詩です。

今「明星」の話が出ましたけれども、「明星」もヨーロッパの絵画の影響を受けます。明治四十年代の「白樺」が、後期印象派を中心に複製展を相次いでやります。これがものすごい人気で、当時の自然主義の渦中にあつた新人たちが触発されます。前田夕暮の向日葵の歌とか、茂吉の「ゴオガンの自画像みれば」も、その折のものです。これは当時本物ではなくて、モノクロのピントのずれたような複製で、それから触発されて短歌を作ったのです。茂吉の例の「あかあかと一本の道とほりたり」もゴッホの影響だろうと言われたりしています。絵画と短歌は意外にコラボレーションが可能ですが、やはりジャンルによって

違うのです。

逆に、ちよつと話が飛躍しますけれども、大井錦亭さんという近代詩文の書家がいまして、既に谷川俊太郎さんの詩を書にしてそれだけで展覧会を開いたり、そういう仮名書道と近代詩を含めた書と、瀬戸内さんがいればまた乗ったかもしれないかもしれませんが、そういうふうな詩歌と書といったものも既に試みられていますし、もつと試みられていくのではないのでしょうか。

特に書家は女流が増えてきました。そのためにかつての漢字中心の書展から仮名書展が膨らんできている状況です。で、そういう点で詩歌との出会いは一層増してくるのではないのでしょうか。あまり活字上だけにとどまらず、文学館の展示で、他ジャンルとのコラボレーションというのはいろいろに試みられていくことが楽しみです。

中村 今橋さん、もう一度ご発言いただけませんか。

今橋 先程お話しした「パリ憧憬」展ですが、私自身はずつとやってきた研究を展覧会にしたらどうなるのか、ということを実際に突き付けられた感じがしました。結果として私としては非常に楽しく監修させていただきました。ただ入場者数にどれだけ貢献したか、ほとんど謎の

状態で、多分残念ながら駄目だっただろうと思います。でも、駒場の近代文学館でも、高知県立文学館でも、館の方々のご努力で、中味はなかなか良かったので、ぜひいらしていただきたかったです。

ところで「パリ憧憬」展では、思った以上に、選ぶのに迷うほど豊かな展示資料が集まりました。というのも今の話に近付くのですが、日本の近代文学を特に考える場合に、それが小説であれ、詩であれ、ほかのジャンルとわたらないことがないということだろうと思うのです。ご存じのように夏目漱石は自分で絵を描きますし、美術評論もしますし、画家の友達もたくさんいます。鷗外は絵こそ描かないものの、ほぼ同じような状況で美術批評にも重要な役割を果たすわけですから、漱石・鷗外というビッグネームに始まり、本当に無名の詩人のような人まで、文学と絵画、あるいは今おっしゃった書道というものまで含めれば、美術の領域にかかわらない人がいない。永井荷風に至っては次に音楽まで含まれます。

一方で演劇との関係を考えてと、演劇も舞台には美術があるわけですので、美術背景と舞台と文学としての脚本とということを見ると、まさにつながっているという感じが

します。

そういう意味で「パリ憧憬」展をやってみると、見せられるものがたくさん出てくるのです。なので、単に本や原稿を並べるのではなく、かなりビジュアルなものとして構成できたということを中心に実感致しました。

駒場にありますが日本近代文学館は多くの資料を収蔵していらっしゃることは私もよく存じ上げていたのですが、驚くのは絵画資料その他のビジュアルな資料をたくさん持っていることです。例えば高村光太郎作のブロンズ像とかあるわけです。展示の準備中にはそれがごろりとそこら辺に置いてあったりする。それから明治初期の錦絵などもたくさん持つているということをお教えいただきました。そういう点で、パリに限らず今後さまざまな展示企画ができるのではないかと思います。

もう一つは文学展とか文学館というものが、もしかしたら資料としてはこれからは近代ということに限られるのかどうか、ということをおむしろ中村先生にお伺いしたいのです。例えば現代の私と同じような世代の作家たちならば当然みんなパソコンを使いますので、手書き原稿が残っていないのかという不安。そもそも手書き原稿が必要なのかとい

う根元的な問題もあります。

また、先程私がバルザックやユゴーについてはその家を  
残すという話をしましたが、今多くの作家の方は多分マン  
ション住まいの方が多いと思うので、マンション保存とい  
うわけにはいかない。(笑い)

それから、ものよりも情報にこだわる世代にどんな  
っていった場合に、これからは文学館というのはむしろ「近  
代文学」に限られてくるようなものなのだろうかというこ  
ろが私はまだ少し分らないところです。そうなると、  
これは懐古的な趣味なのであって、消えていく運命なので  
しょうか？ 実は私自身はそうは思いません。なぜなら、  
私は近代文学がすごいと思うのは、私たちが今使っている  
「日本語」を作り上げてきた文学だからなのです。今の私  
たちの使う日本語ができてきた生の現場というものを、も  
う一度私たちは追体験できるという意味では、文学館は重  
要な使命を負っています。日本の近代文学というものが持  
っているすさまじいパワーは多分いつでも追体験すべきだ  
し、追体験をして面白いし、その面白さをぜひ私は若い世  
代に伝えていかなければと思っています。そういう意味で  
多くの「もの」が残っていることはとても大事です。

そうなると、今度は現代作家、現役作家の方々の資料を  
どんなかたちで今後残していくのか。例えば日本近代文学  
館では文学者の自作朗読ということで「声のライブラリー」  
をずっとなさっていて、これは貴重な財産だと思えますの  
で、今後これはDVDというかたちで残すことは当然可能  
になっていくし、やっていっていることですし、いろいろ  
なメディアをむしろ積極的に活用して、文学の「現場」を  
つかんで離さないということが、おそらく文学館の一番の  
使命なのかなという気も致します。

**中村** 一つ二つお答え致しますと、近代以前の江戸期ま  
で、あるいは明治初期までの文学に関しましては国立の国  
文学研究資料館というのがございまして、そこがやってい  
るわけです。私が漏れ聞いているところでは、それ以降は  
近代文学館があるからいいではないかということでも国立で  
は切り捨てて、われわれは国から一銭の補助も受けないで  
自前で近代をやっているというのが現状でございます。

もう一つお答えしようと思ったのは「声のライブラリー」  
のことです。日本近代文学館には、第一回以来の芥川賞・  
直木賞の原稿がずっとそろっています。それがほぼ池澤夏  
樹さんの時代からワープロ原稿になったのです。ワープロ

原稿を保存する価値がいったいあるのかということが随分議論になりまして、一方ではなるべくなら保存しようという考え方があるのですが、一方では「声のライブラリー」という作家の自作朗読の会を年四回やりまして、一回三人の方、三人の方のうち二人は小説家、一人は詩人という組み合わせでやってきまして、もう一二〇人以上の方がおやりになったわけですが、すべて録画しデジタルデータとして保存している。

そうすると肉筆の原稿が作家の人格をおのずから反映するのと同じように、作家の朗読というのは、加藤さんにも当然既にお願ひしたのですけれども、やはり作家の文体というのは肉体的な生理と不可分に関係するものです。ですから、どこで休止を入れるか、どこで点を入れるか、どこで丸を入れるか、これは俳優の方が上手にお読みになると、つかえつかえ作者が自分の趣向を追いながらのようなかたちで朗読するのでは全く違った味わいがあるもので、われわれとしては亡くなりそうな方は早くやっておこう。(笑い)

加藤さんにお願ひしたのは、加藤さんが早く亡くなるだろうと思っっているからではないので、加藤さんの文学を評

価するから早くやっていたたいたのですけれども、その一二〇人くらいの中でもう十数人亡くなっているのです。これはものすごく貴重なのです。

今日のお話で、われわれは主として文学館の側から言えば篠さんと私が、加藤さん今橋さんからいろいろなことを教えていただいたということになるかと思いますが、皆さんもぜひ文学に親しみ、文学館を応援してください。今日の席を借りましてお願い申し上げます。今日はご清聴ありがとうございました。(拍手)

全国文学館協議会会報 第31号

2005年10月25日 発行

全国文学館協議会 事務局

東京都目黒区駒場4-3-55 日本近代文学館内

〒153-0041 ☎03(3468)4181

ホームページアドレス・[http://www.](http://www.bungakukan.or.jp/)

[bungakukan.or.jp/](http://www.bungakukan.or.jp/)

# 全国文学館協議会会報

No. 31

発足一〇周年記念講演会

2005.10